



# ザ・ベスト@トクガワ

平成28年9月15日(木)～11月6日(日)

主催 徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・中日新聞社

## 【 武家のシンボル – 武具・刀剣 – 】

大名はいうまでもなく武士であり、その集団の長であったため、泰平の世の江戸時代にあっても常に軍備を怠ってはならなかった。

大名家の武器・武具は単なる戦闘実用品ではなく、同時に「武士の心根」を表わすように美しく気品に満ちていることが必要だった。中でも刀剣は「武士の魂」といわれる通り、武士の精神の象徴として大切にされ、最も高い格式を持ち、公式の贈答品の筆頭ともされた。

大名の甲冑は、一軍の大將の着用品である。武威と気品に満ち、贅を尽し技術の粋を集めて、はた目にも美しく見えるように作られた。

- ・指定の◎は国宝、◎は重要文化財、○は重要美術品を示します。＊は定光寺蔵
- ・都合により出品作品を変更する場合がございます。
- ・展示リストの順番は陳列の順番と必ずしも一致しません。
- ・展示期間は、A：9月15日(木)～10月10日(月)、B：10月12日(水)～11月6日(日)となります。

No.	指定 作品名	作者・所有者・寄贈者等	時代	世紀	期間
1	銀溜白糸威具足	徳川義直(尾張家初代)着用	江戸	17	
2	網代三蓋笠馬標	徳川義直(尾張家初代)所用	江戸	17	
3	白鳩・龍凶軍扇	徳川義直(尾張家初代)所用	江戸	17	
4	葵紋蒔絵糸巻太刀拵	徳川将軍家伝来	江戸	17-18	A
5	糸巻太刀拵		江戸	18	B
6	青貝柄槍拵 五本		江戸	18-19	

定光寺の名刀					
7	◎ 太刀 銘 助重(備前国)	徳川綱誠(尾張家3代)所持	鎌倉	13	＊
	◎ 葵紋付糸巻太刀拵	徳川綱誠(尾張家3代)所用	江戸	17	＊
8	◎ 太刀 銘 守家(備前国)	徳川宗睦(尾張家9代)所持	鎌倉	13	＊
	◎ 葵紋付糸巻太刀拵	徳川宗睦(尾張家9代)所用	江戸	18	＊

徳川美術館の名刀					
9	◎ 太刀 銘 光忠(備前国)	徳川綱吉(5代将軍)・徳川綱誠(尾張家3代)所持	鎌倉	13	A
10	◎ 太刀 銘 国行(山城国)	霊仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所持	鎌倉	13	B
11	◎ 刀 無銘 助真(備前国-相模国)	徳川慶勝(尾張家14代)・徳川茂徳(同家15代)所持	鎌倉	13	A
12	○ 刀 無銘 直次(備中国)	徳川宗睦(尾張家9代)所持	南北朝	14	B
13	◎ 短刀 銘 吉光 名物 後藤藤四郎(山城国)	後藤庄三郎・徳川家光(3代将軍)・徳川光友(尾張家2代)所持	鎌倉	13	A
14	◎ 短刀 無銘 正宗 名物 庖丁正宗(相模国)	徳川家康(駿府御分物)所持	鎌倉	14	B
15	◎ 長刀 無銘	霊仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所持	江戸	17	A
16	◎ 長刀 銘 下坂出雲守貞重(越前国)	霊仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所持	江戸	17	B
17	◎ 葵紋散蒔絵糸巻太刀拵	霊仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所用	江戸	寛永16年<1639>	
18	黄金造螺鈿葵紋散太刀拵	浅野長晟(浅野家2代)・徳川義直(尾張家初代)所用	江戸	17	

# 第1展示室

徳川美術館

No. 指定	作品名	作者・所有者・寄贈者等	時代	世紀	期間
19	石首魚石入蠟色塗刀拵	徳川慶勝(尾張家14代)所用	江戸	安政4年 <1857>	
	石首魚石入蠟色塗脇指拵	徳川慶勝(尾張家14代)所用	江戸	安政元年 <1854>	
20	火縄銃 三匁五分筒 銘 稲富一夢様御持筒進上 七月日 摂州住榎並屋勘左衛門重継作	稲富一夢所用	江戸	17	
21	火縄銃 二匁五分筒 筒 人物禽獸唐草文象嵌 銘 SAM THOME		江戸	17	
22	火縄銃 三匁五分筒 銘 刃鉄重張 寛文十三癸丑二月吉日 芝辻小兵衛清正(花押)		江戸	寛文13年 <1673>	
23	火縄銃 唐銅五匁短筒		江戸	19	
24	水牛葵紋蒔絵口薬入		江戸	17-18	
25	葵紋付青漆革胴薬入 附 葵紋付青漆革玉袋		江戸	18-19	
26	金唐革長胴乱 附 早合・口薬入・セセリ		江戸	17	
27	丸木橋図三所物 無銘 祐乘(後藤家初代) 名物		室町	15	
28	盲亀浮木図小刀柄 無銘 祐乘(後藤家初代) 名物	徳川家康・徳川光友(尾張家2代)所用	室町	15	
29	獅子図筭 無銘 乗真(後藤家3代)		室町	16	
30	栗に栗鼠図目貫 無銘 乗真(後藤家3代)		室町	16	
31	船に人物千鳥赤銅鐺 銘 重光 大小二枚		江戸	18-19	
32	無地鉄鐺 号 あげぼの 名物	徳川家康・徳川義直(尾張家初代)所用	室町	15	
33	老松図透鉄鐺 銘 武州住正親		江戸	18	
34	秋野に鷄図頭 銘 大岡政次(花押)		江戸	17	
35	秋草に月・虫図頭 銘 後藤光熙(花押)		江戸	19	
36	秋野図頭		江戸	18-19	
37	紋尽頭		江戸	18-19	
38	葵紋散唐草太刀拵金具		江戸	17	
39	本阿弥光忠折紙 (No. 9 太刀 銘 光忠 附属)		江戸	元禄10年 <1697>	A
40	本阿弥光温折紙 (No. 16 短刀 庖丁正宗 附属)		江戸	承応3年 <1654>	B
41	刀 銘 政常(尾張国)	徳川義宜(尾張家16代)所持	江戸	19	
42	蠟色塗刀拵	徳川義宜(尾張家16代)所持	江戸	19	
43	駿府御分物御道具帳 十一冊の内		江戸	元和4年 <1618>	
44	◎ 初音蒔絵刀掛	霊仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所用	江戸	寛永16年 <1639>	

以上

## 第1展示室のみどころ

### 名物刀剣

「名物刀剣」とは、主に武士が台頭した平安時代から南北朝時代に作られた刀剣のうち、形の特徴や由緒、持ち主の名前などが愛称のように呼び親しまれてきた名刀を指す。

室町時代、足利将軍の下で刀剣の鑑定が発達し、将軍と大名の間で刀剣の贈答が盛んになると、名物刀剣は宝物として扱われるようになった。安土桃山時代には、織田信長や豊臣秀吉が名物刀剣を収集し、軍功への褒賞としたことで、名物刀剣は更に重要な意味を持つことになった。江戸時代中期には、8代将軍徳川吉宗が諸大名の所持する名刀について記録させたという『享保名物帳』によって、名物刀剣の評価が定まった。



## ザ・ベスト@トクガワ

平成28年9月15日(木)～11月6日(日)

主催 徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・中日新聞社

## 【大名の数寄 — 茶の湯 —】

桃山時代に武将の間でも流行した「侘び茶の湯」は、江戸時代には「御数寄屋」の接待として、公式行事の一部に組み入れられた。こうして固定された茶の湯は、「侘び茶の湯」の持っていた、美や新たな価値観をうち立てて行く自由な創造の精神を失って武家故実となり、格式行事と化した。大名は邸に茶室を設け、將軍の「御成」をはじめ、晴の行事に備えた。

茶の湯道具もまた格式道具となった。桃山時代に武将や上層町衆や数寄者が持っていた道具の大半は、江戸時代には將軍や大名の秘藏品となり、「名物」の道具は、時に一国一城にもあたるとされ、その所持、非所持が家の格を表すとまで評された。

- ・指定の◎は重要文化財、○は重要美術品を示します。
- ・都合により出品作品を変更する場合がございます。
- ・展示リストの順番は陳列の順番と必ずしも一致しません。
- ・展示期間は、A：9月15日(木)～10月10日(月)、B：10月12日(水)～11月6日(日)となります。

No.	指定	作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間
<b>元和九年御成 御数寄屋道具取合わせ（猿面の茶室）</b>						
1	◎	古林清茂墨蹟「与月林道皎偈」	徳川家康 徳川義直(尾張家初代)所用	元	泰定4年 <1327>	A
2	◎	虚堂智愚墨蹟「与徳惟禅者偈」名物	北向道陳・細川幽齋・徳川家康・徳川義直(尾張家初代)所用	南宋	宝祐2年 <1254>	B
3		古銅杵折形花生	伝浅野幸長・徳川家康・徳川光友(尾張家2代)・徳川綱誠(同家3代)所用	元-明	14-15	A
4		古銅砧形花生 銘 杵のをれ 名物	豊臣秀吉・石川貞清・徳川家康・徳川義直(尾張家初代)所用	元-明	14-15	B
5		古天明釜 銘 梶 名物	古田織部・徳川家康所用	室町	15	
6		南蛮水指 銘 芋頭 大名物	村田珠光・武野紹鷗・豊臣秀吉・徳川家康・徳川義直(尾張家初代)所用	東南アジア	16	
7		竹茶杓	伝千利休作 良休宗佐(随流齋・表千家5代)追筒	桃山	16	
8		漢作肩衝茶入 銘 宗無 大名物	住吉屋宗無・佐竹義隆・徳川綱吉(5代將軍)・徳川吉通(尾張家4代)所用	南宋-元	13	
9		堆朱牡丹唐草文盆(薬師院盆) 名物		明	16	
10		三島茶碗 銘 三島桶 大名物	千利休・千道安・徳川家康・徳川義直(尾張家初代)所用	朝鮮王朝	15-16	
11		堆朱居布袋函香合 大名物	織田有楽・古田織部・徳川家康・徳川義直(尾張家初代)所用	明	15	
12		砂張建水		朝鮮王朝	16-17	

## 徳川美術館の名碗

13		柿の蒂茶碗 銘 京極	京極家伝来 平瀬露香・佐野弥高亭旧蔵 高松家寄贈	朝鮮王朝	16	A
14		油滴天目(曜変天目) 大名物	油屋浄言・油屋常祐・徳川家康・徳川義直(尾張家初代)所用	金	12-13	B
15		漢作文琳茶入 銘 苫屋 大名物	徳川將軍家伝来 徳川慶勝(尾張家14代)所用	南宋-元	13	
16		唐物丸壺茶入 銘 唐丸壺 大名物	竹腰正晴(竹腰家2代)所用	南宋-元	12-13	

No.	指定	作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間
17		古瀬戸肩衝茶入 銘 筒井 大名物	筒井順慶・徳川家康・徳川義直(尾張家初代)所用	室町	15	
18		唐銅獸耳中蕪花生		元-明	14-15	
19		青磁鯨耳花生		南宋	13	
20		鉄絵牡丹文俵形花生	武野紹鷗所用・山本道伝家伝来	朝鮮王朝	15	
21		唐物茶壺 銘 金花 大名物	六角氏・織田信長・豊臣秀吉・松井有閑・徳川家康・徳川頼宣(紀伊家初代)所用 西条松平家ほか伝来	南宋-元	13-14	
22	◎	寒山拾得図	天遊松谿筆	室町	15	A
23		藤原定家小倉色紙「百しきや」 名物	霊仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所用			A
24		武野紹鷗書状 常智宛	鴻池家伝来	室町	16	A
25		藤原定家小倉色紙「こひすてふ」 名物	徳川家康(駿府御分物)所用			B
26		洞庭秋月図 名物	伝牧谿筆 室町將軍家・菅田屋宗宅・土井利重・徳川將軍家伝来	南宋	13	B
27	◎	遠浦帰帆図 名物	玉潤筆 室町將軍家・豊臣秀吉・徳川家康・徳川義直(尾張家初代)所用	南宋	13	B
28	◎	白天目 大名物	武野紹鷗・武野仲定・徳川義直(尾張家初代)所用	室町	15-16	
29	○	紅安南草花文茶碗		ベトナム	16	
30		井戸茶碗		朝鮮王朝	16	

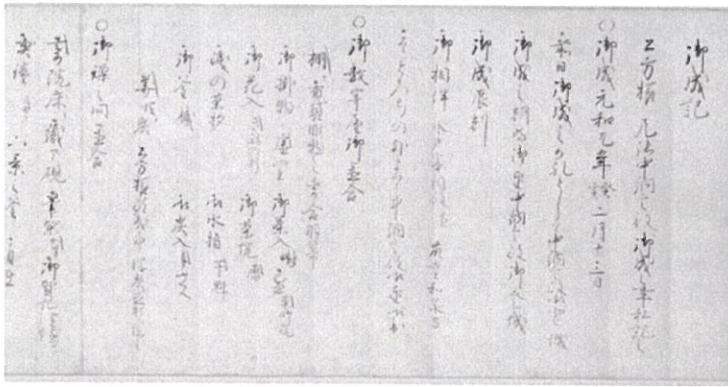
以上

第2展示室のみどころ

元和九年御成の御数寄屋道具取合わせ

本展示では、元和九年(1632)2月13日、2代將軍秀忠による江戸の尾張邸への御成で用いられた御数寄屋の茶の湯道具の御置合わせを再現している。御成とは、將軍が公式に臣下の屋敷を訪問する儀式のことである。この尾張邸御成は、徳川一門に対する事実上初めての御成であり、その後の將軍家御成の規範となった。

元和9年の御成の時、最初の茶事が行われる御数寄屋で使用された道具は、『元和御成之記』に「棚布袋彫物之香合 羽箒 御懸物 虚堂 御茶入 鳴 盆 薬師院 御花入 襷の折 御茶坑 曆 御水指 芋魁 御釜 櫛 御炭 手ふくへ」と記されている。作品が同定できない羽箒、將軍家へ献上された鳴肩衝茶入を除けば、道具の大半が現在も徳川美術館に収蔵され、尾張徳川家では元和御成道具がいかにか大切に伝えられてきたかがわかる。



【参考】元和御成記(巻頭部分)

- 御成記  
(中略)
- 御数寄屋取合せ
  - 棚二布袋彫物之香合① 羽箒
  - 御懸物 虚堂② 御茶入 鳴
  - 盆 薬師院③ 御花入 襷の折④ 御茶坑 曆⑤
  - 御水指 芋魁⑥
  - 涙の茶杓 御炭入 手ふくへ
  - 御釜 櫛⑦
  - 華後ノ炭 公方様被成事後炭足打二組之
- (後略)
- \* 該当する展示作品がある場合、( )内に作品番号を記した。



# ザ・ベスト@トクガワ

平成28年9月15日(木)～11月6日(日)

主催 徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・中日新聞社

## 【大名の室礼 — 書院飾り—】

大名の公式行事は、表御殿の「書院」あるいは「広間」で行われた。御殿の各部屋に設けられた飾り付け専用の空間一床の間・違棚・書院床—には、武家の故実によって各種の道具が飾られた。殿中の飾り付けや典礼を「室礼」といい、江戸幕府はその手本を室町幕府の故実にもとめたので、足利將軍家が秘蔵していた「東山御物」を第一に、唐物と呼ばれる中国製の品々を中心とした飾り付け法が規式とされた。

多くの書画や工芸品の産地が中国であっても、それらを飾り道具に採りあげ、とりどりに組み合わせ、調和の美を創り出したのは室町の武家社会であり、その美意識や価値観は、そのまま江戸時代の大名家に伝えられた。

- ・\*は一部、寛永御成の道具取り合わせを取り入れています。
- ・指定の◎は重要文化財、○は重要美術品を示します。
- ・都合により出品作品を変更する場合がございます。
- ・展示リストの順番は陳列の順番と必ずしも一致しません。
- ・展示期間は、A：9月15日(木)～10月10日(月)、B：10月12日(水)～11月6日(日)となります。

No.	指定	作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間
<b>元和九年御成 御成書院道具取合わせ（書院）</b>						
<b>押板飾り</b>						
1	○	達磨図・政黄牛・郁山主図	三幅対 名物	無準師範筆・同賛 成瀬正虎(犬山成瀬家2代)献上・徳川光友(尾張家2代)所用	南宋	13 A
2	◎	布袋図・朝陽図・対月図	三幅対 名物	布袋図：伝胡直夫筆・偃溪廣聞賛 朝陽・対月図：無住子筆・同賛 足利義満(足利家3代)・豊臣秀吉・神龍院梵舜・徳川家康(東照宮御議道具)所用	南宋-元	13 B
3		楼閣人物図螺鈿中央卓			明	16
4		紫銅向獅子香炉	名物	武野紹鷗所用	明	15
5		飛青磁花生			元	14
6		古銅饕餮文分銅形花生			明	15-16
<b>違棚飾り</b>						
7		青磁香炉 銘 千鳥	大名物	伝豊臣秀吉・徳川家康(駿府御分物)所用	南宋-元	13-14 B
8		堆朱松下人物図香合			明	16-17
9		火道具			江戸	18
10		内朱外青漆長角盆			明	16
11		堆朱騎馬人物図印籠			江戸	19
12		菊唐草蒔絵沈箱			江戸	17
13		黄銅葵紋唐草彫台子皆具			江戸	19
14		葵桐紋散蒔絵台子			江戸	17-18
<b>書院床飾り*</b>						
15		朗詠詩歌	尊円法親王筆		南北朝	14
16		堆黒屈輪文軸盆			明	15-16
17		古銅雨龍形筆架	徳川義直(尾張家初代)所用		明	16
18		樹下人物図螺鈿鞘付象牙柄刀子			明	16-17

### 第3展示室

徳川美術館

No.	指定	作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間
19		靈芝柘榴椿文角軸筆		明	16-17	
20		唐墨 葉玄卿製 鹿鳴		明	16-17	
21		古銅犀形文鎮		明	16-17	
22		古銅馬形水滴		明	16-17	
23		建安瓦硯	伝古田織部・徳川家康(駿府御分物)所用	明	16	
24		染付高士観月図硯屏		明	16-17	
25		唐銅蟹摘波貝文彫卦算		江戸	17-18	
26		山水人物図螺鈿四重食籠		明	16-17	
27		寿字雲鶴文堆朱盆		明	16-17	
28		金銅仙盞瓶形水注	徳川義直(尾張家初代)所用	明	15	
29		楼閣人物図堆朱盆		明	15	

#### 元和九年御成 鎖の間道具取合わせ(鎖の間) \*

1		高麗紫石硯 名物	古田織部・徳川家康(駿府御分物)所用	南宋	13	
2		古銅雨龍形筆架		元	14	
3		堆黒屈輪文軸筆		明	15	
4		唐墨 方干魯製 古俊猊墨		明	16-17	
5		唐銅壺持仙人水滴		明	15-16	
6	◎	安元御賀記	藤原定家筆 徳川家康所用	鎌倉	13	
7		古芦屋八景釜		室町	16	
8		唐物自在釜掛		明	16	
9		紹鷗棚	中村宗哲(7代)作	江戸	19	
10		漢作茄子茶入 銘 茜屋 大名物	茜屋吉松・徳川家康(駿府御分物)所用	南宋-元	13	B
11		竹茶杓 銘 虫喰	伝千利休作 徳川光友(尾張家2代)・徳川綱誠(同家3代)・松平義行(高須松平家初代)所持	桃山	16	
12		灰被天目 大名物	鳥居引拙・油屋常祐・徳川家康所用	南宋	13	
13		黒漆天目台(尼ヶ崎台) 名物	徳川家康(駿府御分物)所用	南宋-元	13-14	
14		青磁鑄文水指		元-明	14-15	
15		砂張建水	近藤家寄贈	東南アジア	17-18	
16		唐銅穗屋香炉蓋置		江戸	18	

#### 元和九年御成 納炬の間道具取合わせ(鎖の間) \*

17		一山一寧墨蹟「応無所住」	徳川家康(駿府御分物)所用	鎌倉	14	A
18		一休宗純墨蹟「初祖菩提達磨大師」	徳川家康(駿府御分物)所用	室町	15	B
19		青磁獅子鈕阿古陀形香炉		明	15-16	
20		堆黒屈輪文花台 一对の内		江戸	17-18	
21		古芦屋糸目釜 名物	武野紹鷗・徳川家康(駿府御分物)所用	室町	15	
22	◎	古備前水指 銘 青海 大名物	武野紹鷗・徳川義直(尾張家初代)所用	室町	15	
23		藤重中次 銘「藤重造」		江戸	17	
24		染付唐草文茶碗 銘 荒木 大名物	荒木村重・千利休・徳川家康(駿府御分物)所用	明	16	
25		青磁酒会形建水		明	16-17	
26		青磁蓋置		明	15-16	

以上



## ザ・ベスト@トクガワ

平成28年9月15日(木)～11月6日(日)

主催 徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・中日新聞社

## 【武家の式楽 - 能 -】

足利将軍家は、猿楽＝能を庇護し、高度に洗練された舞台芸能に育てあげた。大名たちにも大いにもてはやされ、公式行事に演能は欠かせぬものとなった。江戸幕府もこの伝統を承け、舞楽が公家の式楽であったのに対して、能を武家の式楽と定めた。

御殿の広間の前庭には能舞台が設けられており、慶事や公式行事の際には必ず能が演じられ、それを見ながら宴は進められた。そのため大名家には能役者が召抱えられ、各種の曲目に応じられるように、いろいろな装束・能狂言面・小道具が備えられていた。

正月2日(後に3日)には幕府で「謡初め」が行なわれ、大名家でも年中行事とされた。大名自身も謡い、時には自ら舞うことも必須の教養とされていた。

- ・都合により出品作品を変更する場合がございます。
- ・展示リストの順番は陳列の順番と必ずしも一致しません。
- ・展示期間は、A：9月15日(木)～10月10日(月)、B：10月12日(水)～11月6日(日)となります。

No.	指定 作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間
1	能面 黒式尉	伝越智吉舟作	室町	15	A
2	能面 小面	伝是閑吉満作	桃山-江戸	16-17	A
3	能面 瘦女	伝越智吉舟作	室町	16	A
4	能面 増 焼印「天下一近江」	近江満昌作	江戸	17	B
5	能面 瘦男 朱漆花押	伝河内大掾家重作	江戸	17	B
6	能面 般若		江戸	18	B
7	大根巴蒔絵小鼓胴 銘 客来 附 翁蒔絵鼓箱	大倉長右衛門(大蔵流6世宣政)作 徳川義直(尾張家初代)所用	桃山	16	
8	能管 蟬折	伝獅子田作	室町	16	
9	水色・茶・納戸段秋草文唐織		江戸	17	A
10	紅・白・萌黄・紫段籠目に秋の野文唐織		江戸	18	B
11	花色・茶・萌黄段に輪宝・稻妻・杉木立文厚板唐織		江戸	17	A
12	紺地花菱亀甲に龍の丸文厚板		江戸	18	B

## 能舞台

13	紺地牡丹・獅子丸文金欄袷狩衣		江戸	18	A
14	紫地鳳凰文長絹		江戸	19	B
15	紺地唐花文金欄袷法被		江戸	19	A
16	萌黄地紗綾形に輪花文金欄袷法被		江戸	18	B
17	黒地若松に鶴亀文直垂		江戸	18	A
18	花色地菊水文素袍		江戸	19	B
19	狂言面 うそふき		江戸	18	A
20	狂言面 登髭(下髭)		桃山-江戸	16-17	B
21	狂言面 武悪		江戸	18	A

## 第4展示室

徳川美術館

No. 指定	作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間
22	狂言面 乙		江戸	18	B
23	狂言面 狐 金漆銘「狐」 朱漆銘「出目若狹大掾入道 藤原寿満（花押）作」		江戸	17-18	A
24	狂言面 猿		江戸	18	B
25	雲形に縄・画幅文肩衣		江戸	19	A
26	白地波に洲浜文肩衣		江戸	19	A
27	萌黄地糸巻文肩衣		江戸	19	B
28	海松茶地壺尽文肩衣		江戸	19	B
29	紅地花菱文錦・黄毛織鬼頭巾		江戸	17	A
30	薄茶地唐花文燕尾頭巾		江戸	18	A
31	紅地水に菊折枝文袖無し羽織（猿用）		江戸	18	B

以上

### 第4展示室のみどころ

#### 能舞台

この展示室の総檜造りの舞台は、名古屋城二の丸御殿内にあった表能舞台の忠実な再現である。

徳川幕府は、能を武家の式楽（公式の場での音楽）と定めたので、大名の御殿や前庭では必ず能舞台が設けられ、慶事や公式の行事の際には能が演じられた。そして大名家には能役者たちが召し抱えられ、さまざまな演目に答えられるよう、面や装束、小道具類が備えられていた。

#### 尾張徳川家の能面

能には、観世・宝生・金春・金剛などの流派がある。尾張徳川家では、初代義直以来金春流を、シテ（主役）方として重用してきたが、3代綱誠は宝生流を金春流と同格に扱い、6代継友の時代に金剛流、10代斉朝の時代に観世流を重用したため、それぞれの流派にちなんだ能面が製作された。

徳川美術館には、現在、尾張徳川家に伝えられた能面126面、狂言面30面が保存されている。この中には、伝説的な能面の作者である日光や越智吉舟作と伝えられる室町時代の面をはじめ、是閑吉満や友閑満庸、河内大掾家重など名人として名高い面打師たちの作品が多く含まれており、尾張徳川家の能面コレクションの質の高さを示している。

#### 尾張徳川家の能装束

能装束とは、一般的には能を演じる人が、能面や太刀・扇などの道具以外の身につけるさまざまな衣装をいい、演目や役柄によって一定の決まりがある。

「唐織」は、能装束を代表する最も絢爛豪華な装束で、主として女役を表着として使用される。若い女役に用いられる紅色の入った紅入と、中年以上の役柄に用いられる紅色のない紅無の区別がある。このほか、女性役の腰巻や貴族・童子の着附に用いられる「縫箔」、金箔や銀箔を糊で貼り付け文様を表した「摺箔」、主として少年から老人までの男性の着附のほか、荒神・鬼畜の類の役や年配の女性の表着にも用いられる「厚板」、公達の鎧姿や優雅な舞いを舞う女性役の表着に使用される「長絹」などがある。

男性役では「狩衣」や「法被」があり、いずれも単と袷がある。「袷狩衣」は、大臣・神体・天狗・鬼などの威厳のある強い役に、絹や紗などの薄ものの裂地に金や銀の糸で文様を織り込んだ「単狩衣」は神主や老神に、また袷の「法被」は鬼畜・怨霊などの強い役柄や唐人、武将の鎧姿などに、単の「法被」は肩脱ぎの形で平家の公達の武装姿に用いられた。





# ザ・ベスト@トクガワ

平成28年9月15日(木)～11月6日(日)

主催 徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・中日新聞社

## 【大名の雅び — 奥道具 —】

大名自身やその夫人・子供達の私的な生活の場「奥」で、身の回りを飾ったり、使用した道具、また教養を高めたり、趣味や遊びに用いた道具を奥道具という。

大名の華やかな生活をしのばせる豪華な蒔絵の調度品は、婚礼の際の入奥道具に多い。その種類は、香道具・化粧道具・文房具・飲食器・旅道中具・遊戯具・楽器など多岐にわたる。

王朝文化の伝統をひく貝合や聞香は、単なる遊びではなく、武家の婦人に欠かせない教養だった。楽器の演奏も、たしなみの一つである。古くから宝物視されていた古筆や古画はもとより、江戸時代の狩野派・土佐派の作品や、浮世絵なども愛好されていた。

- ・指定の◎は国宝、◎は重要文化財、○は重要美術品を示します。
- ・都合により出品作品を変更する場合がございます。
- ・展示リストの順番は陳列の順番と必ずしも一致しません。
- ・展示期間は、A：9月15日(木)～10月10日(月)、B：10月12日(水)～11月6日(日)となります。

No.	指定	作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間
<b>衣服</b>						
1	◎	紺地葵紋散槍梅文辻ヶ花染小袖	徳川家康(駿府御分物)着用	桃山-江戸	16-17	A
2	◎	紫地葵紋付葵の葉文辻ヶ花染羽織	徳川家康(駿府御分物)・吉通(尾張家4代)着用	桃山-江戸	16-17	B
3	◎	浅葱地葵紋散辻ヶ花染小袖	徳川家康(駿府御分物)・吉通(尾張家4代)着用	桃山-江戸	16-17	B
4		水色羽二重地葵紋付丁子小紋綿入小袖	徳川家康(駿府御分物)着用	桃山-江戸	16-17	A
5		薄水色麻地雪持桐文浴衣	徳川家康(駿府御分物)着用	江戸	17	A
6		薄浅葱鹿ノ子格子に雪輪桐文染浴衣	徳川吉通(尾張家4代)着用	江戸	17-18	B
7		節糸織緞織縫合単羽織	徳川家光(3代將軍)着用	江戸	17	A
8		茶宇縞袷羽織	徳川光友(尾張家2代)着用	江戸	18	B
9		紅絹縮地立涌花束文単衣(振袖)	大丸松坂屋寄贈 紀伊徳川家伝来	江戸	19	A
10		茶練貴地吉祥文腰巻		江戸	19	B
<b>調度</b>						
11	◎	長生殿蒔絵手箱		鎌倉	13-14	
12		蓮池蒔絵経箱		室町	15	
13		桐鳳凰蒔絵文台・硯箱	徳川家康所用	桃山-江戸	16-17	
14		菊の白露蒔絵櫛箱	清泰院大姫(加賀前田家4代光高正室)所用	江戸	17	
15	◎	初音蒔絵櫛箱	靈仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所用	江戸	寛永16年<1639>	
16	◎	初音蒔絵硯箱	靈仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所用	江戸	寛永16年<1639>	
17	◎	胡蝶蒔絵基盤・基筥	靈仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所用	江戸	寛永16年<1639>	
18	◎	宇治香箱	靈仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所用	江戸	寛永16年<1639>	

19	◎ 純金葵紋山水図香盆飾り	霊仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所用	江戸	17
20	◎ 銀檜垣に梅図香盆飾り	霊仙院千代姫(尾張家2代光友正室)所用	江戸	17
21	松橋蒔絵鏡台	聖聡院従姫(9代宗睦嫡子治行正室)所用	江戸	18
22	松竹梅山水蒔絵香棚		江戸	19

## 香合と香木

23	紅花緑葉唐花鴨文香合		明	16-17
24	秋野蒔絵香合		鎌倉	13-14
25	兎文橙香合	東福門院和子作	江戸	17
26	呉須赤絵扇形香合	千宗旦所用	明	17
27	黒織部弾香合	岡谷家寄贈	江戸	17
28	阿蘭陀焼白雁香合	岡谷家寄贈	オランダ	18
29	香木 伽羅 銘 蘭奢待			
30	香木 真名蛭 銘 中川 十種名香の内			
31	香木 伽羅 銘 蘭 一木四銘の内			
32	香木 伽羅 銘 初音 一木四銘の内			
33	香木 伽羅 銘 白菊 一木四銘の内	伝後水尾天皇勅銘		
34	香木 伽羅 銘 柴舟 一木四銘の内			
35	松鴛鴦蒔絵印籠 銘 芝山作		江戸	19
36	諫鼓鶏蒔絵印籠 銘 梶川作		江戸	19
37	釣狐蒔絵印籠根付		江戸	19
38	近江八景蒔絵印籠 銘 梶川作(印)		江戸	19
39	松・牡丹に鳥蒔絵印籠		江戸	19

## 名物裂

40	裂手鑑 五帖の内		江戸	19
----	----------	--	----	----

以上

## 第5展示室のみどころ

## 国宝 初音の調度

初音の調度は、寛永16年(1639)9月22日、三代将軍家光の長女・千代姫が、尾張徳川家二代光友に婚嫁する際に持参した調度で、日本一豪華な嫁入り道具といわれる徳川美術館の代表的所蔵品の一つです。鏡台や貝桶、棚などの蒔絵調度を中心に、染織・金工品など総計75件が国宝に指定されています。

「初音の調度」の名は、『源氏物語』「初音」の帖の「年月を松にひかれてふる人に今日鶯の初音きかせよ」の歌意を全体の意匠とし、その歌の文字をあしでが革手書きに散らしているところに由来しており、見飽きることのない「日暮らしの調度」の別名があります。





# ザ・ベスト@トクガワ

平成28年9月15日(木)～11月6日(日)

主催 徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・中日新聞社

徳川美術館と名古屋市蓬左文庫は、江戸時代には御三家筆頭であった大名家・尾張徳川家伝来の宝物や書籍を収蔵品の中心としています。これらは江戸時代の大家の生活や文化のありようを伝える貴重な品々です。本展では、徳川美術館の名品コレクション展示室と蓬左文庫展示室を会場に、徳川美術館と名古屋市蓬左文庫が所蔵する名品を一挙公開します。

- ・指定の◎は重要文化財、○は重要美術品を示します。
- ・都合により出品作品を変更する場合がございます。
- ・展示リストの順番は陳列の順番と必ずしも一致しません。
- ・展示期間は、A:9月15日～10月10日、B:10月12日～11月6日となります。☆のついた作品は会期中場面替・巻替を行います。
- ・所蔵に\*がついた作品は名古屋市蓬左文庫蔵で、表記のない作品はすべて徳川美術館蔵です。

No.	指定	作品名	作者・所有者・寄贈者等	時代	世紀	期間	所蔵
<b>中国の絵画</b>							
1		琴棋書画図 四幅対の内	伝趙子昂筆 貞松院さい遺物・徳川綱誠(尾張家3代)所用	明	14		☆
2		許由巢父図	呉偉筆	明	15		B
3	○	仙人図	劉俊筆	明	15		A
<b>蓬左文庫の書籍</b>							
4	◎	太平聖恵方 五十一冊の内	玉懷隠著 金沢文庫伝来 徳川家康(駿河御讓本)所用	南宋	紹興年間 <1131-1162>		*
5		方輿勝覧 十五冊の内		元	14		*
6		古今列女伝 三冊の内	徳川家康(駿河御讓本)所用	明	万暦15年 <1587>		*
7		三国志伝通俗演義 六冊の内	羅貫中編 徳川家康(駿河御讓本)所用	明	万暦19年 <1591>		*
8		三国遺事 二冊の内	釈一然撰 徳川家康(駿河御讓本)所用	朝鮮王朝	16-17		*
9	◎	高麗史節要 三十五冊の内	金宗瑞等撰	朝鮮王朝	景泰4年 <1453>		*
10		内訓 四冊の内	徳川家康(駿河御讓本)所用	朝鮮王朝	万暦元年 <1573>		*
11		楽学軌範 三冊の内	徳川家康(駿河御讓本)所用	朝鮮王朝	16		*
12	◎	論語 十冊の内		鎌倉	元応2年 <1320>		*
13		周易 五冊の内	徳川義直(尾張家初代)所用	江戸	慶長10年 <1605>		*
14	◎	齊民要術 二十二巻の内	賈思勰著 金沢文庫伝来 徳川家康(駿河御讓本)所用	鎌倉	文永11年 <1274>		*
15	◎	続日本紀 四十巻の内	金沢文庫伝来 徳川家康(駿河御讓本)所用	鎌倉	13		*
16	◎	侍中群要 十巻の内	金沢文庫伝来 豊臣秀吉・日野輝資・徳川家康(駿河御讓本)所用	鎌倉	嘉元4年 <1306>		*
17	◎	斎宮女御集	伝源俊賴筆 徳川光友(尾張家2代)所用	鎌倉	13		*
18	◎	河内本源氏物語 二十三帖の内 附 桐宇治橋蒔絵書物簞笥	足利將軍家・豊臣秀次・徳川家康(駿河御讓本)所用	鎌倉	正嘉2年 <1258>		*
19		竹取物語		室町	16		*
20		保元物語・平治物語 五冊の内	徳川家康(駿河御讓本)所用	江戸	17		*
<b>信仰のあかし</b>							
21		阿弥陀八大菩薩像		高麗	14		B

蓬左文庫展示室

No. 指定	作品名	作者・所用者・寄贈者等	時代	世紀	期間 所蔵
22	地藏菩薩像		高麗	14	A
23 ◎	刺繡阿弥陀三尊来迎図		鎌倉	14	A
24	善光寺式阿弥陀三尊像		室町	15-16	B
25	白衣観音像		元-明	14-15	A
26	束帯天神像	益叟福謙賛	室町	14-15	B
27	紺紙金字華嚴経 卷四・五十九		高麗	14	
28 ◎	紫紙金字金光明最勝王経 二巻の内		奈良	8	
29 ◎	法華経 八巻の内	懐良親王筆	南北朝	正平24年 <1369>	
30 ◎	西塔院勸学講法則	尊円法親王筆	南北朝	貞和5年 <1349>	
<b>江戸時代の絵画—近世初期風俗画を中心に—</b>					
31 ◎	歌舞伎図巻 上巻 二巻の内		江戸	17	☆
32 ◎	豊国祭礼図屏風 六曲一双の内	岩佐又兵衛筆 蜂須賀家伝来	江戸	17	☆
33 ◎	遊楽図屏風(相応寺屏風) 八曲一双		江戸	17	
34 ◎	本多平八郎姿絵屏風 二曲一隻		江戸	17	
35	三十六歌仙図額 三十六面の内	詞 智仁親王ほか筆・絵 狩野孝信筆	江戸	元和4年 <1618>	☆
36 ○	三十六詩仙図額 三十六面の内	詞 石川丈山筆・絵 伝狩野探幽筆 徳川義直(尾張家初代)所用	江戸	寛永20年 <1643>	☆
37	歴代聖賢図巻 二巻の内	狩野探梁筆	江戸	17	
38	源氏物語画帖	詞 堂上寄合書・絵 土佐光則筆	江戸	17	
39	平家物語図扇面(古筆手鑑「尾陽」所収)		江戸	17	
40 ○	華洛四季遊戯図巻 二巻の内	詞 高橋宗直筆・絵 円山応挙筆	江戸	18	
41	戸山荘八景図巻 二巻の内	狩野養川惟信筆	江戸	18	
42	十旬花月帖 二冊の内	頼山陽・頼杏坪ほか筆 岡谷家寄贈	江戸	文政10年 <1827>	
43 ◎	百花百草図屏風 六曲一双の内	田中訥言筆 岡谷家寄贈	江戸	19	☆
<b>唐物漆器</b>					
44	犀皮屈輪文食籠		南宋	13	B
45	犀皮屈輪文盆		南宋	13	A
46	堆黒牡丹文盆		元	14	
47	狩獵図彫彩漆盆		南宋	13	
48	堆黒唐花鳳凰文盆		南宋	12-13	
49	堆朱梔子連雀文盆 彫銘「張成造」・朱漆印「頼川東房」		元	14	
50	堆朱牡丹尾長鳥文盆 彫銘「大明永楽年製」		明	15	
51	紅花緑葉牡丹尾長鳥文硯箱		明	15-16	
52	菊鷲文白密陀彫文庫		明	15	
53	挿花図螺鈿軸盆 朱漆銘「大明皇慶年製」		元	14	
54	螺鈿桃形樓閣人物図食籠		明	15-16	
55	巴紋牡丹鳳凰雲点斜格子沈金足付盆		琉球	15-16	A
56	箔絵牡丹紋鳥獸草花文十二角形足付盆		琉球	16-17	B

以上